＜ 恩師からの教え ＞

施設長　福田 雅文

(1) 糸賀一雄　障害福祉の父と呼ばれている

『 この子らを世の光に 』（新しい価値観を創造）

「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」

(2) 高谷清　「抱きしめてBIWAKO」 実行委員

1987年11月8日正午　参加者21万2900人、メッセージ参加者5万1300人合わせて26万4200人でびわ湖は抱きしめられた。

「協力する」「分かち合う」「心を寄せる」という、人間の心があってこそ障害をもつ人たちは生きられる。そして、この心を引き出したのは重い障がいをもつ子どもたちであるといえる。この日は人はみなやさしくなった。社会的に役にたたないといわれる子どもたちのために、わざわざ湖岸まで行き、手をつなぎ、1000円を出しあったのだから。自動車できた人も多かったが、交通事故もなく、交通渋滞もなかった。心がやさしくなり、ゆずりあった結果であろう。「人間って捨てたものではないなあ」という感想が多く聞かれた。私は糸賀一雄氏の「この子らを世の光に」という言葉を実感した。（「はだかのいのち」高谷清著）

(3) 鈴木康之　糸賀一雄賞受賞

「子ども達の清く澄んだ瞳、呼びかけに応じる笑顔、懸命に生きる姿をみれば明らかです。一人ひとり同じいのちです。すべてのいのちは輝きを持ちます。触れ合い、支え合うことで人はより輝き、幸せが生まれます。人が人間になる、その大切さを、いまも重症児は教えてくれています。」

（4）北浦雅子　重い障がいのある我が子のために生き切った母

親の会「全国重症心身障害児者を守る会」 元会長

「最も弱いものをひとりももれなく守る」というスローガンで社会活動を展開

―生きるとは、幸せとは―

「生きるとは何か」「人生の幸せとは何か」を問われ、無言の姿から様々なことを教えてもらった。この笑顔こそが常に私のこころに鞭打って励ましてくれた。人を信じ、なんの邪心も持たず、みるものの心を洗い清めてくれる。私たちは障がい児に関わりながら、次第に自分自身が育てられ、「生きることの尊さ」「人の情のありがたさ」「人生の幸せは形ではなく心である」を知った。

（北浦様の母としての生き方に感銘を受けて「重い障がい児に導かれて」―重症児の母、北浦雅子の足跡　と題して本を書き、守る会に寄贈した。）

（5）仁志田博司

日本の周産期医療の草分け的存在で、晩年には「子どもたちにあたたかい心を育む運動」と題して、全国各地で講演活動を展開し、旅立つ直前までこの活動を続けた。

あたたかい心とは

1）他人のことを思う心
2）他人の悲しみと痛みを感じる心
3）他人とつながりを感じる心

恩師たちの教えを大切にして、地域や施設の中でスタッフと共に活動していきたい。

利用者の永元画伯さんが
私の踊っているところを描いてくれました